



vol.09

亜細亜大学
国際関係学部編集



国際関係・多文化
フォトジャーナル

KaYa
09
亜細亜大学 国際関係学部

ISSN 2188-3122

Asia University Faculty of International Relations

Contents

04 **ESSAY**
中国史研究者の
フィリピン・マニラ見聞録
青山 治世

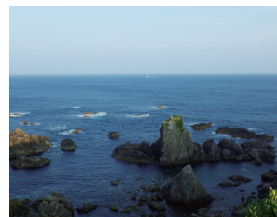
16 **ESSAY**
街路のエクリチュール
——サイゴンからホーチミン市へ
大塚直樹

24 **ESSAY**
ヒンドゥー教徒の結婚式
小磯千尋

32 **ESSAY**
難船が結ぶ縁
中野達司

42 銅像よもやま話
シヤク銅像
高山陽子

50 授業実践
アクティブ・ラーニングの実践例
高山陽子



かや 榎 とは



亜細亜大学内のゆうちょ銀行ATMの裏側に記念樹があります。それが榎の木です。この記念樹は、1941（昭和16）年の本学創立当初に植樹されました。先達に敬意を表わしつつ、半世紀以上にわたり本学の歩みを見守ってきた榎とともにグローバル化時代に挑戦してゆこうという国際関係学部の思いが本ジャーナル名の由来です。



亜細亜大学 国際関係学部

〒180-8629 東京都武蔵野市境5-8

学部についての詳細は

<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

『榎』はPDFデータでも閲覧いただけます。
※亜細亜大学学術リポジトリから入手できます。



写真1：タール火山噴火の瞬間（朱琳氏撮影）

ESSAY

中国史研究者の フィリピン・マニラ見聞録

青山 治世

1 滞在延長となった フィリピンの旅

まもなくWHO(世界保健機関)によつてCOVID-19と命名されることになる新型コロナウイルスが中国の武漢で広がり始めているというニュースを初めて聞いたのは、二〇二〇年一月一日ごろ、フィリピンのホテルでテレビを見ていた時だった。中国の近現代史を専門としている私がフィリピンを訪れたのはこの時が初めてで、渥美国際交流財団が設立したSGRA(関口グローバル研究会)が主催する国際フォーラム「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」(会場はフィリピン大学ロスバニョス校)に、招待討論者として出席するための訪問だった。

国際フォーラムの内容はSGRAのホームページから二〇〇ページ超の講演録(『東アジア』の誕生——一九世紀における国際秩序の転換)がダウンロードできるので、ご興味があればそちらをご覧ください。

ただき、今回はそれとは別に、初めて訪れたフィリピン、特にマニラでの私なりのフィールドワークの一端を、写真とともにご紹介することにしたい(写真は特記する以外、すべて筆者が撮影したものである)。なお、ふだんは文献史料を中心に歴史研究を行っているため、いわば素人フィールドワーカーの見聞録としてお読みいただければ幸いである。

この時の滞在日程はもととも一月八日一三日で、九日一日に国際フォーラムに出席し、一二日に行われるマニラ歴史地区のスタディー・ツアーに一日参加して、翌日には帰国することになった。ところがスタディー・ツアーが行われていた一二日の午後三時前(日本との時差はマイナス一時間)、首都マニラの南約七〇キロにあるタール火山が噴火し、火山灰の影響で翌日の帰国便が欠航となり、代替便の確保も難しく、しばらく帰国できない状況になってしまった。

結局、主催団体が手配してくれた代替

便は一七日となり、初めてのフィリピン滞在は期せずして四日間延びることになった(その間、大学の授業は休講し、翌週の補講となったため、学生の皆さんにはご迷惑をおかけすることになったが…)。ちなみに写真1は、スタディー・ツアーで私とは別のコースに参加してい

た知人の朱琳氏(東北大学准教授)が、火山湖であるタール湖の外輪山の高台から湖を眺めていた時、噴火の瞬間に偶然立ち会って撮影したものである。氏の話では、そこから宿泊先のホテルがあるモンテインルパ市アラバン地区までバスで戻る際は、噴火から逃れる車列で大渋滞だったという。

初めてのフィリピンということもあり、国際フォーラムへの参加以外にも、歴史に関わる場所を可能な限り見ておきたいと思い、主催者が手配した一日だけのスタディー・ツアー(マニラ歴史地区コース)にも参加した。同コースでは、①リサール公園、②サンチャゴ要塞、③マニラ大聖堂、④カーサ・マニラ博物館、⑤国立博物館などを回り、スペイン統治時代からのフィリピン・マニラの歴史を肌で感じることができる機会となった。ただ、歴史、特に中国史を専門とする私としては、このスタディー・ツアーで見学する場所以外にも見たいところがある

あったし、団体で回るよりも、自分の興味関心に従って、心の趣くままに見て回りたいという思いもあった。

本来であればこのスタディー・ツアー以外にマニラの史跡を見学する機会はなかったが、火山噴火でしばらく帰国できなくなったことで、期せずしてスタディー・ツアー以外に自由に見て回れるチャンスを得た。火山噴火も落ち着き、数十キロ離れたマニラ市内には直接影響がない模様となったので、一四日にマニラ市内の史跡や博物館を改めて見て回ることにした。その時に回ったのは、⑥国立人類学博物館、⑦マニラ城壁、⑧菲華歴史博物館(バハイ・チノイ)、⑨チャイナ・タウン(中華街)である。

2 スタディー・ツアー

まずはスタディー・ツアーで回った①〜⑤について見ていきたいが、これらは大体どの旅行ガイドブックにも解説があるので、ここでは簡単な紹介にとどめた



写真4：リサールの処刑の様子がブロンズ像で再現されている



リカとの戦いや交渉に「失敗」した点もふまえ、その歴史的な評価が分かれているためだろう。

リサール・モニュメントの東側には、北側と南側の通り沿いに、フィリピン革命・独立運動に関わった人々の胸像が立ち並んでいた（写真5）。ただ私が行った時は、それぞれの胸像が誰なのかまったくわからなかった。すべての胸像に名前が記されていないから。胸像の台座には名前と説明が示された銅板が付いていたはずだが、すべて外されていた。「目指せ、世界一周を日常に！世界40か国旅行者の現地滞在記」というウェブサイトに、リサール公園を訪れた旅行者による写真と記事（二〇一七年一月投稿、二〇二一年一月閲覧）が掲載されているが、そこにアップされている同じ胸像の台座には銅板が付いている様子が確認できる。単なる銅板のリニューアルにたまたま遭遇したとは考えにくい。

フィリピン革命・独立運動に関わった人



写真5：リサール公園に立ち並ぶフィリピン革命・独立運動に関わった人々の胸像（なぜか名前と説明の銅板が外されていた）



写真3：ホセ・リサール処刑地の入口



写真2：リサール・モニュメント（リサール公園）

い。

①リサール公園

一九世紀末に活躍しスペインの植民地当局に処刑されたフィリピン独立運動の指導者ホセ・リサール（Jose Rizal 一八六一〜一九六）を記念した公園で、首都マニラの中央に位置し、その中心には衛兵が守るリサール・モニュメントが建っている。写真2は東向きに撮ったものだが、モニュメントの左側の道を少し進んだ北側にホセ・リサールの処刑地がある。リサール公園自体は出入り自由の開放的な空間だが、リサールの処刑地は写真3のように壁と樹木で閉ざされ、外から中の様子をうかがうことはできず、二〇ペソ（約四五円）を入口で払って入場できるようになっていた。

壁の向こうに入ると、リサール処刑の場面がブロンズ像で再現されていた（写真4）。像の大きさは等身大より一・三倍くらい大きい。リサールの背中には銃

弾によって服に空いた数カ所の穴までリアルに再現されていた。息を飲むような厳かな空間である。処刑地を囲むように、リサールの生い立ちから言論活動、処刑が決定されるまでのいくつもの場面が、ブロンズ像で再現されていた。特に場面ごとの解説は書かれていなかったが、きつとフィリピンの小中学校の子どもたちや一般の見学者がここを訪れた際に、これらの像を見ながら教師や旅行ガイドの解説を聞くのだろう。

フィリピンではこのようにホセ・リサールを英雄として各地で顕彰しているが、日本の世界史教科書にも登場する、同時期のフィリピン独立運動のもう一人の指導者アギナルド（Emilio Aguinaldo y Famy 一八六九〜一九六四）のフィリピンでの露出度がきわめて小さいのは、日本人には意外に思うかもしれない。それは悲劇的な死によって「英雄」となったリサールと比べて、スペインに代わってフィリピンを統治することになったアメ

きなかった(後日、後述する自由散策でリベンジを果たすことになる…)。
 イントラムロスの中でも有数の観光地が、その北端に突き出すように築かれたサンチャゴ要塞である(写真7)。イントラムロスの北側を流れるパシッグ川の河口に面し、マニラ防衛の戦略上の要ともいえる要塞である。この要塞の一角に、処刑されるまでホセ・リサールは拘束されていたことから(写真8)、リサール記念館も設けられている。そしてこの旧市街にはフィリピンで最も有名なカトリック教会、マニラ大聖堂がある(写真9)。スペインのマニラ統治の開始とほぼ同時に建設され、増改築、地震による倒壊、再建を繰り返してきた。一九世紀後半に再建された聖堂は、太平洋戦争による日米の戦闘によって破壊され、戦後、現在の大聖堂が再建された。スタディー・ツアーで訪れた日はちょうど日曜だったため、ミサが行われていた。



写真8：サンチャゴ要塞の一角にホセ・リサールは処刑されるまで拘束されていた。ここでもその場面が再現されている。



写真7：サンチャゴ要塞と筆者



写真9 上・左：マニラ大聖堂

物たちの評価については、現在の政治とも結びついた複雑な状況も存在するのだろうと想像するが、それ以上の調査はしていない。

リサール公園の東側にあるアグリフィナ・サークルとよばれるエリアには、一六世紀に世界一周の途上にフィリピンのマクタン島に侵入したマゼラン(Ferdinand Magellan 一四八〇〜一五二一)を討ち取ったラブラブ(Lapu-Lapu)のひととき大きな像が立っている(写真



写真6：アグリフィナ・サークルに立つラブラブ像(周囲に警戒線が張られ近づけなかった)

6)。ただこちらも遠くから見かけた時はラブラブとは気づかなかった。像から半径二〇メートルくらいのところを囲むように警戒線が張られて近づけなかったからだ。像の前には名前や功績が書かれた石碑があるが、警戒線の外からは文字を読むことができない。姿形や扱われ方から見てラブラブだろうとは思ったが、写真を撮り左下の石碑部分の画像を手元で拡大して、ようやくラブラブであることを確認した(その後、旅行ガイドでも

確認した)。こちらも警戒線が張られていた理由は定かではないが、何か歴史評価をめぐる軋轢があるのだろうか：

②サンチャゴ要塞、③マニラ大聖堂

スペインがフィリピンを植民地支配したのは一六世紀後半から一九世紀末の一八九八年までのことで、三〇〇年以上にわたる。現在でもフィリピン、特にスペインのフィリピン統治の拠点だったマニラには、スペイン時代の多くの建物や史跡が残されている。その多くは、イントラムロス(Intermus「壁の内側」という意味)とよばれるスペインが築いたマニラの旧城塞都市の中にある。先ほどのリサール公園から北に数百メートル歩くと、イントラムロスの南側の城壁が見える。一六世紀後半に築かれた旧市街を囲む全長四・五キロの城壁は、今もほぼその全容をとどめている。スタディー・ツアーの時は、バスの中からその城壁をわずかに見ただけで、近くで見るとはで



写真12：国立人類学博物館（フィリピンの歴史・民俗に興味・関心がある人は必見）

南部の地理に詳しい人なら、「大埔」で気が付くかもしれない。大埔とは、現在は広東省梅州市に属する大埔県のこと（梅州市に編入されたのは一九八八年、



写真10：カーサ・マニラ博物館



明・清時代は広東省大埔県)、そこまでわかれば、「湖寮」とは大埔県の中の湖寮鎮であることがわかる。そうすると、「扶西陳」は名前であろう。これ以上のことは不明だが、ホセ・リサールの現在の漢字表記は「扶西・黎利」なので、あるいは「扶西」はホセ (Jose) かもしれない。陳が姓なのは間違いないので、つまり（先祖または本人が）広東省大埔県出身の華人（中国系）の「扶西・陳」の邸宅がここにあったということだろう（石だけ運ばれて石畳に再利用された可能性もあるが）。これについて何か情報があれば、ぜひご教示いただきたい。

カーサ・マニラ博物館を後にして次に向かったのが国立博物館 (National Museum) で、ここがスタディー・ツアー最後の見学場所だった。その名とおりフィリピン随一の博物館で、旅行ガイドにも充実した展示のすばらしさが紹介されているとおり、絵画作品などは歴史的なものも含めて目を見張る展示内容

④カーサ・マニラ博物館、⑤国立博物館 マニラ大聖堂から南に二〇〇メートルほど行ったところにカーサ・マニラ博物館がある（写真10）。ここはスペイン統治時代の特権階級のスペイン風邸宅をそのまま利用した博物館であり、家具や調度品も含めて、植民地時代の特権階級の暮らしを体感することができる。ここもフィリピンの旅行ガイドブックにはほぼ必ず出てくるので、博物館自体の紹介はこの程度にするが、あまり人々が気に留めないであろうものを一つ紹介しておきたい（中国人観光客の目には留まるかもしれないが）。それが写真11の文字が刻まれた「石」である。きれいな楷書体の漢字で書かれているので、日本人でもほぼ読み取れるだろう。「大埔□扶西陳□湖寮」（□は欠けている部分）と刻まれている。

この石は、カーサ・マニラ博物館がある一角の西側の出口を出たところの足元にある石畳の一つである。出口のところ

だといえよう（なかには、日本軍によってフィリピンの市民が虐殺・暴行される絵画も展示されていた）。ただ、フィリピンの歴史を体系的に見学しようとする場合、芸術作品の展示が中心のこの博物館では、その目的を達することはできない。それは、日本にあるフィリピン大使館観光部のホームページで紹介されているこの博物館の日本語名称が「国立美術博物館」となっていることからわかるだろう。国立博物館に到着して二時間ほど経過したところで、同行者の一人の歴史研究者がそのことに気づき、歴史を見るなら近くの国立人類学博物館 (National Museum of Anthropology 写真12) に行くべきだと言い出したことから、その人たちと連れだって、そちらの博物館に向かったが、帰りの集合時間まで残り四五分を切っており、結局、駆け足でざっと見るだけに終わってしまった。この時点では翌朝帰国の途に就くことになっていたの



写真11：「大埔□扶西陳□湖寮」と刻まれた石畳の石（カーサ・マニラ博物館がある一角の西側出口付近）

から湾曲して溝が掘られているが、これはおそらく排水のために後から掘られたせいで右下部分が欠けてしまい、おそらく二文字消えてしまっている。中国



写真14：スペイン統治時代に築かれた城塞都市マニラ（イントラムロス）の城壁
（城壁はほぼ完全な形で残されており、市街と一体化して城壁の上を歩けるところもある）

過ぎた北東部分では、城壁の上を歩くこともできた（写真14右）。まさに街自体が博物館といった様子で、歴史を五感で感じる事ができる体験だった。

⑧ 菲華歴史博物館（バハイ・チノイ）、⑨
チャイナ・タウン（中華街）

午後には訪れたのは菲華歴史博物館（バハイ・チノイ Bahay Tsinoi）とチャイナ・タウン（中華街）である。中国史が専門の私としては、フィリピン華人（中国系フィリピン人）に関わる場所もぜひ見ておきたかったが、滞在延長で期せずして叶うことになった。

菲華歴史博物館（写真15）はフィリピン華僑・華人の歴史について見学できる施設で、国立・公立の博物館ではなく、華人組織の華裔文化伝統センター（Kaisa Heritage Center）によって運営されている。つまり、華人たちの視点や主張、思いが如実に表れた博物館である点をふまえて見学する必要がある。



写真15：菲華歴史博物館（バハイ・チノイ）
（日本と同じく電線が多く、電線を選り抜いて建物の全景を撮るのは難しい…）

訪れる前はワン・フロア程度の展示施設かと思っていたが、写真の建物全体がほぼ博物館となっている立派なものだった。華人たちが自前でこれほどの博物館を開設しているのは、フィリピン人の公的な「歴史」の中に華人たち（自分たちの先祖）の存在がほとんど出てこないために、自分たちでそれを示したい、示さなければならぬという思いがあるためだ

だった。

3 自由散策

ところが前述のとおり、タール火山の噴火により帰国が延期になったことで、マニラ市内を一日中「自由散策」する機会が訪れた。

⑥ 国立人類学博物館、⑦ マニラ城壁

自由散策日となった一四日午前に、同じく帰国できなかった数人の歴史研究者たちとまず向かったのが、スタディー・ツアーではわずかな時間しか見られず悔いを残していた国立人類学博物館だった。いわばリベンジである。日本では「人類学」といえば、人類の生物学的特性を研究対象とする自然人類学（biological anthropology）形質人類学〔physical anthropology〕ともい、理系学部に属するのが一般的）を指すことが多いが、欧米の anthropology（人類学）は、「自然人類学・形質人類学」と「文化人類学

（cultural anthropology）・社会人類学（social anthropology）」の双方を含むのが一般的で、同館の展示内容はその双方を含み、むしろ後者のほうに重きを置いた展示となっていた。つまり、そうした欧米の学問体系やフィリピンにおける博物館の分類を知らない、フィリピンの歴史を見学したいと思っても、こちらの博物館を見逃しかねないのである。

国立人類学博物館では、現在発見されている中でフィリピン最古の文字とされているラグナ銅板碑文（一九八九年発見）や、フィリピンの諸民族の貴重な文化財の実物を見ることができるとは、スペイン統治時代の遺物（写真13）も充実したパネル解説とともに展示されている。ただし、独立運動以降の近現代の歴史に関する展示は、ここでは見ることはできない。つまり、古代から現代にいたるまでの歴史を一か所で見られる国立の施設は、フィリピンには現状ないといえよう。

国立人類学博物館をじっくり見てリベ



写真13：フィリピンを征服したスペインの大砲と砲弾

ンジを果たした後、スタディー・ツアーではバスの中からわずかに見ただけだったマニラ城塞（イントラムロス）の城壁を歩いて見に行くことにした。ぐるりと一周したいところだったが、時間も限られるので、南西部分の城壁の外側を一キロくらい歩くにとどめた（写真14左）。後述するチャイナ・タウンに向かう際に通

る



写真17：チャイナ・タウンに向かうパシッグ川の橋は中国風の装飾が施されていた

に見るためには、ぜひ見学していただきたい博物館である。
 菲華歴史博物館を後にして最後に向かったのがチャイナ・タウン（中華街）である。マニラのチャイナ・タウンは旧市街（イントラムロス）からパシッグ川



写真18：チャイナ・タウンの入口にある「中菲友誼門」（修理中）

を挟んだ北東側にある。ここにはスペイン統治時代から中国人（華僑・華人）居住区があり、スペイン当局がイントラムロスからの大砲の射程圏内に彼らを住まわせたといわれている。チャイナ・タウンに入るパシッグ川の橋は中国風の装飾

これまで中国大陸を中心に、台湾、香港、韓国など東アジアの各地は何度も足を運んできたが、はじめて訪れたフィリピンに期せずして一〇日ほど滞在する。いろいろと見て、体験することができた。専門以外のものに触れることで、自分の専門分野についてもより多面的に見る視点・視野を得られることを、あらためて実感する旅となった。

*

が施され（写真17）、渡ったところには「中菲友誼門（Filipino-Chinese Friendship Arch）」が建っているが（写真18）、街としては中国風の建物や装飾はあまりなく、横浜や神戸のようなチャイナ・タウンの印象はなかった。

ろう。国立人類学博物館でも、近代以前の中国との貿易、中国船の来航などに関する展示はあったが、フィリピンに定着した華僑・華人に関する展示はほとんどなかった。また、フィリピンで出版されたものではないが、滞在中にマニラの書店で購入した『図解フィリピンの歴史』（Jose Raymond Canoy, *An Illustrated history of the Philippines*, Oxford, John Beaufloy Publishing Limited, 2018）でも、華僑・華人に関する記述は、コラムとして一ページ割かれているものの、フィリピンには中国系の人々もいたといった程度の記述で、フィリピンの歴史にそれほど大きな影響があったようには描かれていない。フィリピンに限らず華僑・華人が多い東南アジア諸国に共通することだが、華僑・華人やメスティーソ（混血の人びと）の影響が大きいことは、いわば自明のことだが、それがゆえに（現在の華人たちの影響力の大きさとの関係もあり）かえって公的な「歴史」からは「抹消」さ

れている、あるいは存在が薄められている側面がある。菲華歴史博物館のような存在は、そうした傾向への華人たちの一種の抵抗、自己主張でもあるといえよう。その象徴といえるのがフィリピン革命・独立運動の英雄ホセ・リサールの出自についての説明である。リサールは父方が中国系（母方が日本系との混血）であることはよく知られており、フィリピン人にも自明のことだというが、前述したりサール関連の施設での解説はもちろん、前掲の『図解フィリピンの歴史』にもそうした記述はない。こうした現状をふまえてか、菲華歴史博物館ではリサールの六代前までさかのぼる家系図まで掲げて、華人系であることを強調している点は印象的である（写真16）。また、アギナルドも華人の血が入っていることが説明されていた。

活躍した華人系の政治家・聖職者・財界人などについても、パネルや関連する実物などを使って詳細に展示されており、全体をじっくり見学すれば半日はかかる博物館である。日程が短い旅行ではなかなか日本人は訪れる機会はないだろうが、フィリピンあるいは東南アジアの歴史を、華人という要素をふまえて多面的

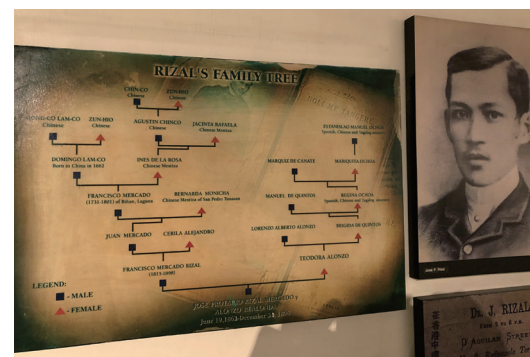


写真16：ホセ・リサールの写真と家系図（リサールの父方・母方ともに先祖の多くが中国系であることが強調されている）



写真1：FAIFO（フェイフォ）が店舗の名称になっている（2014年8月撮影）。

ESSAY

街路のエクリチュール

——サイゴンからホーチミン市へ

大塚直樹

地名（ある場所を指し示す名称）と比較したとき、街路名（通り名）は変更が加えられやすい。両者の相違点として、地名がローカルな歴史的・地理的な条件と相関関係をもつ場合が多いことがあげられる。たとえば、バス停の名称は、行政区分に基づく市町村名だけではなく、バス停の位置する周辺の呼び名（またはかつての呼称）に依拠していることも散見される。いわばバス停のローカルな名称は、そこに暮らす／それを知る人びとにとっては有意義なものとして立ち現れるが、一見の旅行者にとっては奇異な心証をもたらす。

地名の有する、こうした固有性は、必ずしも静態的なものとしてとらえることができない。たとえば、世界遺産として有名なベトナム中部のホイアンは、フェイフォ（FAIFO）という別名をもつ。フェイフォという地名は現在、世界遺産区を踏破すると、土産物店の名称に利用されたり、世界遺産区における一つの記号と

されたりしている（写真1）。

この地名の由来は、フランス植民地時代に同地がフェイフォと呼ばれ、その名が地図に刻まれていたことにさかのぼる。FAIFOという地名は、まずベトナム語のアルファベット表記でFを使用しないことから外来語といえる。一説には、ホイイフォというホイアン近隣の村名をヨーロッパ人がなまけて記録した結果と指摘されている（ファン・フィレ、一九九三：三三三）。小倉はまた、ベトナム研究者の五つの見解を取り上げて、一七世紀の地図に示されたホイアン河口部の地名であるHai Pho（海岸部の要衝の意）を外国人がフェイフォと発音し、それがヨーロッパの探検家や宣教師たちによって海図に記録されたことに由来すると推察している（小倉、一九八九：五一―五三）。したがって、少なくともフェイフォという名付けは西洋からの視点ととらえられる。

他の事例をあげれば、ダーカオ（Da

Kao）という地名も同じような系譜をたどっている。ダーカオは、ホーチミン市第一区に現存する地名で同地に立地する（市場の名称ともなっている（写真2））。地名の由来は、Dat Hoと呼ばれていたこのエリアを、フランス植民地当局がDat Hoと読み・記述した結果、現在のDa Kaoになったという。

このことから、ローカルな地名ないしその固有性は、権力のせめぎ合いによってもたらされた異種混交の産物という可能性を有するものとしてとらえるべきであろう。地名にその可能性を認めるとするならば、地名と比較して相対的に変更が加えられやすい街路名は、より直接的に権力が作動しやすい対象といえる。さらに言及すれば、道路の名称が土地の人びとの呼び名と地図や標識に記された名称と異なることも散見される。この点は土着の実践と標準化・識別化してゆく企画とのせめぎ合いとも解される（スコット、二〇一七：三七―四〇）。



写真2：ダーカオ市場の外観（2014年3月撮影）。

以上に鑑みて、本稿では街路名の変遷からこうした異種混交性の考察を進めてみたい。具体的には、現在のホーチミン市第一区周辺の旧版地図を参照し、その変遷をさぐってゆく。

現在のホーチミン市にみる街路名の歴史的な変遷を考えると、大きくはクメイ

ベトナムに名前を残している。ここで興味深い点として、外国人の名前がつけられた街路名のいずれもがフランス植民地時代には別の名称で呼ばれていたことがあげられる。手元にある別の旧版地図を確認すると、フランス植民地時代には、これら三つの通りがそれぞれ Rue Pelerin (バスツール通り) 、Rue Bourdais (カルメット通り) 、Rue Bourses (イエルサン通り) と呼ばれていた。この旧版地図は立教大学アジア地域研究所



写真3：改修前のグエンフェ通り。改修された現在は、歩行者天国になっている。正面奥は人民委員会（2014年9月撮影）。



写真4：ハイバーチュン通り（とレーズアン通りとの交差点）の標識（2014年3月撮影）。

らえてよいであろう。第二に、フランス人ないし、フランスにゆかりのある人物名があげられる。三名ともに広い意味で医療関係者であり、とくにカルメット (Calmette) は、フランス植民地時代にサイゴンに設立されたバスツール研究所の初代所長であった。バスツールに関しては、この研究所にちなんで街路名が付与されている可能性もある。イエルサン (Yersin) はまた、ニヤチャンにバスツール研究所を創設し、現在、大学名としてベトナムに名前を残している。

蔵であることから、一九四〇年の北部仏印進駐以前に作製された可能性が高い。しかしながら、地図自体から精確な時期を特定できる情報を読み取れない⁽³⁾。このことから、フランス植民地時代末期に街路名が変更された可能性も排除で

きないものの、ベトナム共和国時代に改めて名付け直されたことも想定できる。とくにベトナム共和国の政治的立場を考慮に入れば、フランスないしフランスに関連がある人名が通り名に附されることは想定範囲の内であろう。さらに現在

[表1]ホーチミン市1区中心街の街路名：1958年と2021年とが同一の場合

現在の名称	由来	備考
Nguyen Hue	人名	タイソン・グエン氏三兄弟の末弟(1753-92)
Le Loi	人名	レー朝太祖(1358-1433)
Ham Nghi	人名	グエン朝皇族(1872-1943)
Hai Ba Trung	人名	1世紀の姉妹、後漢への反乱軍を組織
Pasteur	人名	化学者、微生物学者(1822-1895)
Tran Hung Dao	人名	チャン朝の武将(1226-1300)
Pham Ngu Lao	人名	チャン朝の武将(1255-1320)
Calmette	人名	医者(1863-1933)
Yersin	人名	細菌学者(1863-1943)
Nguyen Trai	人名	レー朝の重臣(1380-1442)
Hung Vuong	人名	ベトナム原初の王
Nguyen Thai Hoc	人名	ベトナム国民党の指導者(1901-30)
Ly Thai To	人名	リー朝初代皇帝(974-1028)
Nguyen Cu Trinh	人名	グエン朝の將軍(1716-1767)

ル系の人びとの居住領域、グエン朝の統治、フランス植民地時代、ベトナム共和国時代とに時期区分することができよう。さらに、ポスト・フランス植民地期から、一九五五年のベトナム共和国建設宣言に至る、ベトナムによる実質的な領域支配の時期も考慮する必要があるかもしれない。ここでは手元にある旧版地図のうち、ベトナム共和国時代のものを参

照し、考察を進める。該当する旧版地図は、テキサス大学オースティン校ペリー・カスターナグ図書館に所蔵されている、一九五八年に国家地理局 (Nha Dia Du Quoc-Gia) が発行し、アメリカ陸軍地図局 (U.S. Army Map Service) が一九六一年に複製した二万分の一のそれである⁽²⁾。まず確認すべき点として、ホーチミン

市中心街の都市景観は、フランス植民地時代に形成された骨格を原則的に引き継いでいる。このことから、街路名を歴史的に比較対照しやすいという特徴を有する。表1に街路名が旧版地図と現状とが同じ例を提示した(写真3・6も参照)。現行政区分の第一区周辺の通りのうち、主として大通り (Đ.Đ.Đ.) を中心に抽出しており、すべての街路名を網羅しているわけではない。したがって、表1の街路名では人名のみが抽出されているものの、人名以外の街路名が現在すべて変更されていることを意味しない。

表1では三つのパターンが読み取れる。まず第一に、フランス植民地時代以前の歴代王朝関係者、とくに皇帝や武将の名前があげられている。言い換えれば、現在のベトナムという国家の枠組みを創設するのに貢献した、ないしそのルーツと位置づけうる人びとがいれば顕彰の意味で街路名に利用されていると

[表2]ホーチミン市1区中心街の街路名の変遷

旧版地図の名称	由来	備考	現在の名称	由来	備考
Tu Do	「自由」の意		Dong Khoi	「同時蜂起」の意	
Hong Thap Tu	「赤十字」の意		Nguyen Thi Minh Khai	人名	共産党員 (1910-41)
Thong Nhat	「統一」の意		Le Duan	人名	共産党員 (1907-86)
Gia Long	人名	グエン朝初代皇帝 (1762-1820)	Ly Tu Trong	人名	革命家 (1914-31)
Le Van Duyet	人名	政治家 (1763/64-1832)	Cach Mang Thang Tam	「八月革命」の意	
Cong Ly	「真理」の意		Nam Ky Khoi Nghia	「南部蜂起」の意	
De Lattre de Tassigny	人名	軍人			
Thai Lap Thanh	人名	知識人・政治家 (1899-1950/51)	Dong Du	「東遊」の意	
Nguyen Van Thinh	人名	医者・政治家 (1888-1946)	Mac Thi Bui	人名	烈士 (1927-51)
Vo Di Nguy	人名	グエン朝の武将 (1745-1801)	Ho Tung Mau	人名	共産党員 (1896-1951)
Nguyen Hoang	人名	グエン氏一族の有力者 (1525-1613)	Tran Phu	人名	共産党員 (1904-31)
Cong Hoa	「共和」の意		Nguyen Van Cu	人名	共産党員 (1921-41)
Thanh Thai	人名	グエン朝皇帝 (1879-1954)	An Duong Vuong	人名	紀元前の人物、安陽王

革命に功績があった人物名、およびベトナム革命にかかる歴史的な出来事が街路に名付けられている。東遊「運動」も独立運動に連結されることから、広い意味で同じカテゴリーに分類される。

また変更の対象となった街路名をみると、一方で、現行の政治体制に対して、敵側に分類されるような人物名（ド・ラトル・ド・タシニ、タイ・ラップ・タイン、グエン・ヴァン・ティン）も見定めることができる。他方で、必ずしも変更された根拠を同定できない通り名も散見される。レー・ヴァン・ズエットやティン・タイのように、現在、他エリアの街路名に採用されている人物も表2にはみられる。このことから、二通りのパターンを想定できる。すなわち、旧来の通り名を積極的に変更する意図があった場合と、万難を排して新しい街路名を付与したいという明確なモチベーションが存在した場合である。また「自由」や「赤十字」といった名詞・固有名詞も変更対象

まで名称変更がなされなかった理由としては、とくにカルメットとイェルサンについては、ベトナム医療の発展に対する貢献が評価されていることが想像される。

第三に、ベトナム国民党の指導者が含まれていることがあげられる。ベトナム国民党は、一九二〇年代末に結成され、反植民地運動を展開したものの、第二次

世界大戦後、ベトナムと袂を分かつような活動をおこなっていた。したがって同党は、ベトナムの現行政権と融和性が高いわけではない。ただし、グエン・タイ・ホック自身は、一九三〇年のイェンパイ蜂起後に処刑されており、ベトナム国民党の指導者という以上に愛国者と位置づけられているととらえることも可能

かもしれない。

次に表2に、ベトナム共和国時代から街路名が変更されている通りを示した（写真7-9も参照）。表1と同じく一部を抽出した。ここから以下の点を確認できよう。まず変更された通り名は、現在のベトナム党・政府と密接に関わっている



写真5：ファムグーラオ通り。旅行会社が林立する（2014年3月撮影）。



写真6：イェルサン通りの標識（2014年3月撮影）。

文献
 浅井辰郎(二〇〇七)「資源科学研究所の地図の行方——多田文男先生の英断」お茶の水女子大学教育学部地理学教室『お茶の水大学所蔵外邦図目録』お茶の水女子大学教育学部地理学教室、五一九ページ。
 小倉貞男(一九八九)『宋印船時代の日本人——消えた東南アジア日本町の謎』中公新書。
 スコット、J.C.(二〇一七)『実践 日々のアナキズム——世界に抗う土着の秩序の作り方』清水展・日下渉・中溝和弥訳、岩波書店。

註

- (1) 「読み・記述した」の部分がベトナム語の原文では「doc va viet」となっている。ヒアリングした地名を書き記したものと推察される(Le Trung Hoa, 2012: 76-77) したが、再引用。出典は *Monographie de la province de Gulinh*, 1902, p.18)。
 (2) 今回使用した旧版地図は二〇二一年一月現在、テキサス大学オースティン校ペリー・カスタータ図書館からダウンロード https://maps.lib.utexas.edu/maps/world_cities/cxu-pclmaps-saigon_shee2-1961.jpeg
 (3) 同研究所がこの地図を所蔵している経緯など詳細は、浅井(二〇〇七)を参照。

ファン・ワイ・レ(一九九三)「ホイアン——歴史と現状」日本ベトナム研究者会議編『海のシルクロードとベトナム——ホイアン国際シンポジウム』ホイアン国際シンポジウム日本語報告書編集委員会訳、穂高書店、二六―三八ページ。
 Le Trung Hoa chu bien, Nguyen Dinh Tu (2012) *So Tay Dia Danh Thanh pho Ho Chi Minh*, Nxb Van Hoa-Van Nghe TP HCM.

になっている。

以上のようにホーチミン市中心街の街路名の刻まれ方を確認すると、広義のナショナルなものへ回収されやすい性質を有していることがわかる。ただし、単純にナショナルリズムに収斂できないような名づけがみられることもまた事実である。同時に、誰が聞いてもわかる、ない

し多く人びとに認識されている、また意味づけがされやすいというニュアンスで、地名と比較した場合、外に開かれた性質をもっているといえよう。こうした多面的な視点から今後も、「街路の記述」に関する考察を、時間的・空間的な対象を広げつつ進めたい。



写真7：中央にドンコイ通り。正面奥にサイゴン大聖堂、右手前にコンチネンタルホテル(2010年8月撮影)。



写真8 統一会堂からみたレーズアン通り(2013年3月撮影)。



写真9 朝の路地裏(Hem)の風景。路地にも名称が付与されている(2014年3月撮影)。

ESSAY

ヒンドゥー教徒の 結婚式

小磯千尋

はじめに

結婚式が人生最大のイベントであることは万国共通といえよう。インドのヒンドゥー教徒にとっても例外ではない。ヒンドゥー教徒は生涯に一六の人生通過儀礼をおこなうことで知られている。それは、「二六の人生通過儀礼」を意味する「ソラー（二六）・サンスカール（通過儀礼）」と呼ばれる。この一六の通過儀礼は、母親のお腹の中にいるときから始められ、誕生の儀礼はなんと四番目の儀礼である。それに続く儀礼は生後一二日目に行われる命名式、生後八か月目のお食い初め式、次いで重要なのは日本の元服式にあたる一一番目の聖紐式（男児のみ八一二歳で行われる）である。その他今ではあまり行われない儀礼が三つあり、一五番目が結婚式である。ちなみに、一六番目の儀礼は「最後（アンティム）の儀礼（サンスカール）」つまり、葬式である。

の結婚式を紹介する。二〇一八年に参列したインド、マハーラーシュトラ州ブネーのパラモン家庭の結婚式である。かつて、ヒンドゥー教徒の結婚式は一週間以上にわたって祝われていたというが、筆者がここ三〇年来参列した結婚式は、マンガル・カールヤライ（慶事斎場）と呼ばれる結婚式場に一日泊して、二日ばかりで行うのが一般的となっている。

結婚式まで

インドの結婚式は四〜六月と一一、一二月に集中する。これは農業生産の関係で、農閑期に結婚式が行われていた名残りであるといわれている。結婚式はさまざまな儀礼で成り立っているが、招待客に食事を振る舞い、お披露目をするのも重要な目的である。

結婚式の儀礼を行う前に最も重要なことは、花嫁花婿のホロスコープから吉なる時間を割り出すことである。この儀礼の前に、日本の結納にあたるシャカル・

プーラという婚約式も行われる。この際、両家の親族が一緒に会食し、贈り物を贈り合う。

ブニヤーハヴァーチヤン（吉事を行う時間をバラモンに訊ねる儀礼）…米の小山を二つ作り、水を満たした二つの壺を用意し、五枚のマンガーの葉の上に米を満たしたカップを置き、水の神ヴァルナを招来する。儀礼執行者の父親はそのカップを娘（息子）の額につけ、次いで妻、自分自身につける。これを三回繰り返す。そのうち、バラモン僧が儀礼に相応しい時間を告げる。

マンダパデーヴァター・プラティシユター（神を招来する場の設定）…儀礼執行者は六枚のマンガーの葉に一六回糸を巻きつけ、箕の上に布と米を置く（写真1）。六枚のマンガーの葉と殻つきのココナツを左側に、右側には二七個のビンロウの実を置く。その上にビンロウの実を一個と米を満たし、蓋をして糸をまいた小さな壺が置かれる。この壺はカラ

シャと呼ばれ、ヒンドゥー儀礼では神を招来する依り代として重要な役割を果たす。カラシャはその口の上にマンガーの葉とココナツを置いた形が一般的である（写真2）。一説にはこのカラシャは人間の肉体と水を象徴するともいわれる。ここに神を招来して、白檀のペースト、米、花、灯明、樟脳、布などを供える。

この儀礼用の祭壇は婚礼儀礼が終了するまでそのままにされ、礼拝が続けられる。

花嫁花婿は式の五日ほど前に、ウコンで全身パックを行うハラド・チャダヴネを行い、全身を浄化する。花嫁はヘナのペーストで手足に吉祥の模様を描くメヘンデー儀礼がそれに続く。それらが済むと、チューリーというガラスのブレスレットを一二本ずつ両手に嵌める儀礼（チューリー・バルネー）を行う（写真3）。これは腕輪屋さんで花嫁の自宅まで出張して、花嫁だけではなく親族、親しい友人たち全員にびつたりのサイズの腕輪を嵌めてくれる。腕輪は豊穡を象徴

する緑色が吉なる色とされ、花嫁はじめ女性たちは緑色の腕輪をつける。

この儀礼が行われた同じ夜、新郎新婦



写真1：箕の祭壇



写真2：吉祥の壺カラシャ



写真5a：両家の父親



写真5：花婿と姉妹



写真3：ガラスの腕輪を嵌める

両家による隠し芸大会のような会が3時間
間にわたって行われた。これは、北イン
ドでサンギート(歌)と呼ばれる儀礼で、
映画などを通してポピュラーになり、マ
ハラーシユトラでも最近行われるよう
になったという。両家が交代で出し物を
披露し、素人とは思えないマジックや踊



写真6：花嫁と姉妹



写真5b：花婿への贈り物

り、歌が披露された。両家の親睦を深め
るいい機会となっているようだ。
いよいよ結婚式前日。花嫁一行は結婚
式場に入り、花婿一行を迎える準備をす
る。女性参列者はここぞとばかりに、一
張羅のサリーやドレスにまばゆいばか
りの金のアクセサリーを身につけてい
る。男性たちも伝統的なクルターやドー
ティーを纏った人が目立つ。
夕方、式場の入り口に花嫁の親族たち
が集合して、花婿の一行を迎える。以前
は、花嫁は花嫁の家に向かうバライトと
呼ばれる楽隊や友人たちの行列を従え、
白馬に跨って向かうのが一般的であっ
た。最近特に都会では、バライトの仰々
しさは不人気だという。
花嫁の両親や親族が勢ぞろいして、花
婿一行を迎える儀礼をマドゥバルカ(写
真4)またはシーマント(境界)儀礼と
いう。まず、花嫁の母親が花婿に敬意を
表して、花婿の足を灌頂し礼をつくす。
続いて、蜂蜜、ヨーグルト、ギーを混ぜ



写真6a：花嫁への贈り物

嫁の父親が花婿の父親にココナツその他
の贈り物を渡す(写真5a)。花嫁の両親か
ら花婿に様々な贈り物が手渡される(写
真5b)。一連の贈答活動が終わると、花
婿に代わって花嫁が舞台上上がり、姉妹
の手によってムンダーヴァルを結んでも
らう(写真6)。今度は花婿の両親から花



写真4：
シーマント儀礼

たものを花婿に三回食べさせる。
花婿は齋場内に用意された儀礼のため
の舞台上導かれ、花婿の姉妹の手によっ
てムンダーヴァルというビーズの飾りを
額に結んでもらう(写真5)。続いて、花



写真7：両家の母親

嫁に様々は贈り物が渡される(写真6a)。花嫁の母親と花婿の母親が親愛の情を込めて抱き合せて(写真7)、結婚式前日の儀礼は終了し、レセプションに移る。レセプションは立食形式で、広い庭を開放して行われた。花嫁花婿、親族は舞台上で参列者からお祝いの言葉や贈り物を受け取る。ここまでは前夜祭で、結婚式の本番は翌日早朝から執り行われる。

結婚式当日

結婚式当日は儀礼に終始する。主だった儀礼を順番に列記する。

僧が、ミルクに浸けた白い糸で向かい合って座った花嫁と花婿の首と腰に四周ほど巻く(写真11)。巻かれた糸は上から順に巻き取られ、何重にもしたあと、ウコンの塊を縛ってから花嫁の手で花婿の右手首に結ばれる。この儀礼は新郎新婦の絆を象徴するものであろう。
マンガラストラ・バンダン(吉祥のネックレスをかける)・・・新郎新婦両家のつながりを象徴する二つの金のお椀型の

すべての儀礼の最初はガネーシャ神への礼拝(ガネーシャ・プージャー)が行われる。ヒンドゥー教では、吉事を始める前に、障害を除く神ガネーシャへ万事滞りなく行われるように祈願する習わしとなっている。米の上にキンマの葉を置き、その上にガネーシャ神を象徴するピンロウの実を置き、礼拝する。

ガウリーハル・プージャ(パールヴァティー女神への礼拝)・・・花嫁は母方の叔父から贈られたサリーを纏い、祭壇にパールヴァティー女神を招来して一人で礼拝する(写真8)。銀でできた小さな女神像は別名アンナプールナ(穀物を満たす)女神と呼ばれ、匙を手に持った姿で表わされている(写真9)。匙は無限に物をすくうことを象徴し、豊穣を意味する。この女神像は花嫁が祭壇から隠し持つて、婚家に入る。その際、新郎は女神像を探して奪い取る儀礼(アンナプールナ・ハラン)も行われる。
カンニヤダーン(娘の贈与)・・・花嫁の父

ペンダントヘッドをつなげた黒いビーズのネックレス(これは既婚女性を象徴するアクセサリー)を花婿が花嫁にかける(写真12)。

カインペルネー(耳をひっぱる)・・・花嫁の男兄弟が花婿の耳を引っ張り、「姉妹を悲しませることがあったら許さない」と警告する(写真13)。男兄弟がいなない場合は、従兄弟が行う。
サブタパディー(七歩の儀礼)・・・ヒン



写真10：カンニヤダーン

親が花婿に娘を贈る儀式。結婚式の中心的な儀礼である(写真10)。
ストラ・ヴェーシタン(花嫁と花婿を糸で巻く)・・・祭祀を執り行うバラモ



写真8：ガウリーハル儀礼



写真9：アンナプールナ女神の像



写真11：ストラ・ヴェーシタン



写真12：マンガラストラ



写真15：ムフルタ

この儀礼をもって、婚姻が宗教的にも社会的にも正式に成り立ったと認知される。これで一連の婚姻儀礼は終了する。一般的にはこのあと、参列者に食事が振舞われる。花嫁と花婿は互いにお菓子を食べさせ合い、座が盛り上がる。最後に締めめの儀礼カルマ・サムパティが行われると、参列者に見送られて花嫁は花婿の家に向かう。花婿の家でも重要な儀礼が続く。

グリハ・ブラヴェーシユ（花嫁が婚家に入ること）ラクシユミー・プージャン（富の女神ラクシユミーの礼拝）…新婦は新郎の家に富と吉祥をもたらす女神の象徴と讃えられている。初めて婚家に入るときは、戸口の上に米を満たした升を置き、それを足で倒して家に入る。新郎の母親が花嫁花婿の足をミルクで灌頂し、二人に燈明を回すアールティという儀礼を行う。この時花嫁は必ず右足から家に入らなければならないとされている。

参考文献

Sahsrabudhe, J.V.: *Kanyai sada Mangalam*, Dharmik Prakashan Sanstha, Mumbai, 2010.



写真13：耳を引っ張る儀礼

ドゥー教徒の結婚式の象徴ともいえる儀礼である。米で七つの小山を作り、花嫁が花婿のエスコートを受けながら、マントラ（真言またはお経）に合わせて、右足で一つずつの米の山に足を載せる（写真14）。第一歩は穀物の豊穰のために、第二歩は活力、第三步は富と繁栄、第四步は家族の幸せ、第五歩は家畜と家財の



写真14：サブタディー

獲得、第六歩は六つの季節が規則的に巡ってくることを、第七歩は互いの固い絆を祈願する意味が込められているという。地域によってまた宗派によって七歩で祈願するものは若干異なるが、総じて豊穰祈願ということは共通している。

マンガラーシユタカ（八つの聖なるマントラ）|| ムフルタ（吉祥なる時刻）…

米を一握り盛った二枚の板の間を布で分け、それぞれに花嫁と花婿が立つ（写真15）。占星術で割り出された二人にとっての吉祥なる時刻に八つのマントラが唱えられ、二人を隔っていた布が取り除かれ、「ニリークシヤン（顔合わせの儀礼）」となる。この時、周りにいる人々は色つきの米のシャワーを二人に振りかける。

結び

マハーラーシュトラの結婚式は儀礼に始まり儀礼に終わるといっても過言ではない。儀礼におけるさまざまな象徴性は農業に起源をもつようだ。儀礼においては、豊穰を象徴するものとして、米が重要な位置を占める。ピンロウの実やキンマの葉、ココナツ、ウコンなども儀礼に欠かせない。結婚儀礼は子孫繁栄を祈願する重要な通過儀礼であるため、縁起のよいものが用いられる。

ESSAY

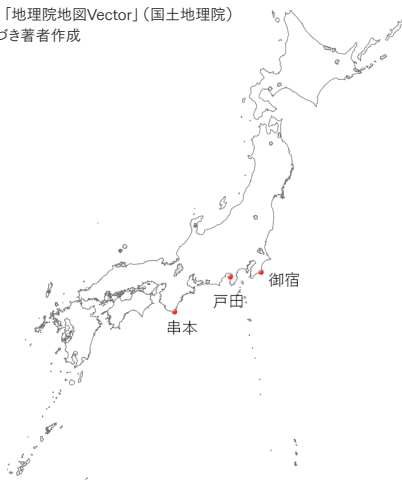
難船が結ぶ縁

中野達司

板子一枚下は地獄。航海は危険と隣り合わせである。十九世紀には世界の船乗りの五人に一人は航海中に死亡していたと云われる。難船が多かったことを物語るものである。映画にもなったタイタニック号は冰山との衝突により沈没したが、頻度において難船の原因としてより脅威となるのが嵐である。戦時を除く我が国の難船史上で被害者最多と思われる洞爺丸（青函連絡船）の事故（一九五四年）は台風、暴風、激浪によるものであり、一、一五五人が犠牲となる大惨事であった。

嵐に襲われ日本の沿岸で難船した外国の船舶にまつわる話は、乗組員を漂着した土地の住民が救助したの類いの美談も含めて、いくつか語られてきている。助けられた者、そして助けた者ありで、そこに生じた縁と云うべきものは、その後どうなったのであろうか。本稿はそのような縁の舞台を辿ってみようというものである。対象となるのは、御宿（おん

図1：「地理院地図Vector」（国土院）に基づき著者作成



じゆく、千葉県）、戸田（へだ、静岡県）、そして串本（くしもと、和歌山県）である。（図1）

御宿

御宿には関東地方有数の海水浴場があり、また童謡「月の砂漠」は同地が発祥だそうだが、御宿の海では約四〇〇年前に、嵐で流されてきた外国船が遭難している。そして御宿は、その船が向かって

いた太平洋の対岸にあるメキシコの港町、アカプルコと今日、姉妹都市の関係にある。

一六〇九年九月三十日の夜、御宿の田尻海岸で一隻の外国船が座礁し破船した（写真1）。ガレオン船と呼ばれたスペインの貿易船（サン・フランシスコ号）で、共にスペイン領であったフィリピンのマニラからメキシコ（当時はヌエバ・エスパニーヤ）のアカプルコに向かう途中、台風による暴風雨に遭って漂流した挙句のことであった。乗組員三七三人が海に投げ出され、五六人が犠牲となる。岸に辿り着いた者の存在は翌朝、土地の人の知るところとなり、救助活動が行われる。一寒村の住民が総出で、異国の遭難者に献身的に手を差し伸べ、可能な限りの衣食を提供したと伝えられる。救助された者はその後、同地を治める大多喜藩、さらには江戸幕府（「関ヶ原」後ながら「大阪冬・夏の陣」の前のことであつた）に保護される。

この難船者の中にはスペインのフィリピン総督を務め、任が明けて帰国途中であったロドリゴ・デ・ビペロがおり、彼は江戸、さらに駿府を訪れ、第二代将軍、徳川秀忠、そして大御所、徳川家康に謁見している。家康の計らいで、デ・ビペロら難船者は、家康が三浦按針（ウイリアム・アダムズ）に造らせた船で、若干の日本人と共に翌年（一六一〇年）八月にメキシコに向けて日本を発っている。日本は「種子島」以来、既にポルトガル人、スペイン人とはまみえてきてはいたが、徳川家康もデ・ビペロもその機を外交に活かそうとし、各々が自らの政治的思惑から動き、通商関係の確保などを目論むが、結局は結実せず、やがて日本は二〇〇年以上に及ぶ鎖国に入る。

この難船、そして救助が日本、スペイン両国間の外交関係を開くということにはならなかったが、デ・ビペロがその日本での体験を『ドン・ロドリゴの日本見聞録』として著したことで、その難船に

まつわる諸事は日本側の記録、伝承と共に後々まで伝わることになり、それは今日の日本・メキシコ間の友好の象徴的な礎である。一九二八年には御宿の漂着地



写真1：デ・ビペロ一行の船が座礁した田尻海岸

近くに記念碑が建てられ、今日その地はメキシコ記念公園となっている。御宿町とメキシコのアカプルコ市およびテマチャルコ市(デ・ビペロの生誕地)が、また御宿の近くの大多喜町とクエルナバカ市(「常春の地」と呼ばれ、メキシコ有数の保養地である。豊臣秀吉によるキリスト教弾圧の犠牲となった二十六人の殉教者の壁画があることでも知られる)は姉妹都市の関係を築いている。

件の海難事故の当時はスペイン領であったメキシコは一八二一年に独立するが、同国は日本にとって世界の中で特に友好的な関係にある国といえよう。「黒船」以来、日本は欧米列強に不平等条約の締結を強いられてきていたが、一八八八年にメキシコと結んだ日墨修好通商航海条約(墨・墨西哥Ⅱメキシコ)は日本が外国と締結した最初の平等条約だったと云われる。日墨両国は一九七〇年代には留学生を一〇〇名ずつ交換するなどの関係であり(この留学生の交換制度は、

規模は縮小したものの今日も続いている)、また両国間の経済関係も密であり、メキシコは日本にとって経済連携協定のシンガポールに次ぐ二番目の締約国(二〇〇五年発効)である。そして両国間の友好関係が語られるとき、メキシコ独立以前の、この御宿での出来事は往々にして触れられるものである。一九七八年にはメキシコ大統領が御宿を訪問している(写真2)(写真3)。

御宿を訪れると、同地のメキシコとの関係深しを目の当たりにすることになる。御宿駅から海岸方面に伸びるメインストリートには、同地を訪問したメキシコ大統領の名が冠されている。その道を駅から歩くと、メキシコの姉妹都市との関係を記した看板があり、その横には御宿町歴史民俗資料館があって、約四〇〇年前の難船救助以来のメキシコとの縁にまつわる資料も展示されている(写真4)。さらにその通りの先には「黒沼ユリ子のヴァイオリンの家・日本メキシコ友

好の家」がある(写真5)。かつてメキシコに居住して子供に音楽を教え、「メキシコからの手紙」(岩波新書)の著者としても知られる名バイオリニストの黒沼ユリ子氏は今日、日本で活動し、メキシコとの交流を積極的に進めているが、その拠点は御宿である。

戸田

静岡県沼津市戸田(かつては田方郡戸田村)は伊豆半島の駿河湾側北端近くに

位置し、巾着状の内湾(戸田湾)を擁する天然の良港であり、伝統的に漁業が盛んである(写真6)。戸田港所属の遠洋漁船団が一九六五年にマリアナ諸島域において台風で遭難するという痛ましい難船の歴史もある。今日は駿河湾深海の海産物を供することでも知られ、温泉地として観光業も振興されている。戸田の湾口から眺望する富士山は絶景との評価も高い。その戸田は江戸末期にロシアと縁があったが、それは難船と関わるもので

あった。

一八五四年十二月二十三日、マグニチュード八・四と推定される地震、そしてそれに伴う津波が本州太平洋岸で起こり、「安政の東海大地震」と呼ばれる。その前年に「黒船」で浦賀沖に現れたペリーによる米国からの開国要求に応じ、揺れる江戸幕府は、一方でロシアからの同様の要求に対処している最中でもあった。軍艦ディアナ号で来訪したプチャーチン率いるロシアと江戸幕府の交渉が伊豆、下田において始まったのは、その地震の前日のことである。下田はその地震とそれに伴う津波で「全戸数八五六戸中八一三戸が流失」との記録もあるような甚大な被害を蒙り、ロシア側は下田沖に停泊していたディアナ号において、その津波による被害に遭っている。水兵一名が犠牲となったが、またディアナ号の船体の損傷著しく、修理を要する状態となる。下田において修理することに、クリミア戦争下ゆえ、敵国であったイギリス、



写真4：御宿町歴史民俗資料館。サン・フランシスコ号難船に関する資料も展示されている。



写真5：独特の色彩の「黒沼ユリ子のヴァイオリンの家・日本メキシコ友好の家」



写真3：メキシコ記念公園内の「日西墨三国交通発祥記念碑」(後方)および「抱擁」像(低温状態で救助されたスペイン船乗組員を御宿(岸和田村)の女性が自分の体温で温めた、という言い伝えを表した像。メキシコからの寄贈)



写真2：メキシコ記念公園のメキシコ大統領来訪記念碑

あったと思われる。プチャーチンや士官らは寺院に、水兵はそれぞれに新築された長屋を宿所とした(写真8)。

ディアナ号の一行は三班に分かれて帰国の途に就くが、プチャーチンらは完成後間もないヘダ号に五月八日に乗船して帰国を果たしている。(他の二班のうちヘダ号以前に米国船により帰国した一行があった一方、最後となった班はドイツ船を利用したが、イギリス船に拿捕され帰



写真7：戸田造船郷土資料博物館に展示されているヘダ号の模型

国まで一年近くを要している。)プチャーチンの下田来訪の目的は戸田での滞在期間中に達成され、下田において日露親和条約が一八五五年二月七日に調印されている。また、ヘダ号の建造が日本の造船史上において果たした役割は実に大であったとされる。それらを功績と認められたゆえか、プチャーチンは維新後の一八八一年、明治政府から叙勲(勲一等旭日大綬章授与)されている。そして翌々年に没するが、一八八七年にはプチャーチンの息女が戸田を訪問し、同地への謝意を表明している。

戸田(そして下田、宮島村)を舞台とするこの一件を辿ると、その延長線上に日露友好を考えなくてはならない。戸田とソ連時代を含むロシアとの友好関係は続いて来ていると聞くが、国政レベルの関係は決して良好に推移しているとはいえない。日露戦争あり、第二次世界大戦末のソ連による対日参戦ありで、いまだに日露間では平和条約が締結



写真6：戸田湾奥から湾口を望む。狭い湾口の手前には巾着のような湾が広がる。

フランスに知られることを警戒するロシアが難色を示し、結果として同じ伊豆にあって外洋に目立ち難い戸田が修理地となる。破損した船舶を伊豆半島相模湾側の下田から駿河湾奥部にある戸田まで移動させることが問題であったが、応急修理を施し一八五五年一月十四日、ディアナ号は下田を出航する。

翌日、伊豆半島西岸を航行中、時化に見舞われ損傷が生じ、戸田への入港能わず、漂流して駿河湾最奥部の沖合に停泊するに至る。動員された近くの漁民らによって乗組員は全員救助され宮島村(今日は富士市に属する)に上陸し、荷物も陸揚げされる。さらにディアナ号の船体(排水量二、〇〇〇トン)であり、当時の日本の常識からすれば桁違いの巨艦であった)は戸田に曳航されることとなる。漁民の漕ぐ小舟(一〇〇艘ほどとも伝わる)によって曳航される途中、巨浪によって曳航不能となり、ディアナ号は沈没する。

プチャーチンら五〇〇名を超すロシア人一行は陸路で戸田に向かい、一月二十四日に到着し、其処に翌一八五五年五月初めまで滞在し、代艦(ヘダ号と称される)を葦山代官や沼津藩主の応援も得て建造することとなる。乗組員の所持品にあった船舶設計図を参考にしてロシアの技術将校らによって設計され、付近で調達できる木材や江戸から送られた造船用資材などを用いて、戸田や近隣の船大工らによって西洋式帆船ヘダ号(排水量八七トン)は約三ヶ月で完成される(写真7)。

以上がディアナ号沈没の、そして代替艦ヘダ号建造の雑駁な経緯である。設計図というものに従って造船する経験のない船大工が、言語や度量衡のハンディを乗り越え、伝統的な技術と道具で、堂々たる西洋型帆船を建造したことは驚嘆に値しよう。またその建造の間のロシア人の生活を支えた日本側の、とりわけ戸田の人々の対応にも賞賛されるべきものが



写真8：ロシア人の宿所となった宝泉寺(右側)および本善寺。宝泉寺にはプチャーチンら高位の者が、本善寺にはそれ以外の士官が宿泊した。

されず、所謂北方四島をめぐる領土問題は解決からほど遠い。

斯様に国家間の関係には厳しいものがあるが、戸田造船郷土資料博物館の入り口に「幕末戸田村にのこされた歴史——西洋型船ヘダ号の建造——日本人とロシア人の友愛」(写真9)とある。あの

したとされる。エルトゥールル号の日本への航海の目的の一つは、その三年前にトルコ（当時オスマン帝国）を日本皇族が訪問したことなどへの返礼であった。東京で特使が天皇に謁見し、所期の目的を果たしての帰路、横浜から神戸に向かう途中、同号は遭難した。辛くも命を長らえた者は大島から海路で神戸に送られ、同地で天皇派遣の医師によって治療を施された後、日本の軍艦によりトルコに送り届けられている。

このトルコ人の悲劇は日本国内で大きく報じられ、多くの義捐金が寄せられたと伝わる。また、海岸や海底から回収された物品、遺品もトルコに送り届けられている。大島村は事故の半年後に樫野崎の殉難者墳墓に墓碑（土国軍艦遭難之碑、土・土耳其IIトルコ）を建てて慰霊し、一九三七年には新慰霊碑がトルコの拠出で建てられ、「エルトゥールル号遭難五十周年追悼祭」が前倒しで執り行われ



写真12：トルコ軍艦遭難慰霊碑。難船のあった海を見下ろして立っている。左端は1891年建立の「土国軍艦遭難之碑」である。

一方トルコでは、大島（串本）の人々の献身的な救助が広く伝わり、政府が物心両面の形で謝意を表している。日本から義捐金を届けにトルコを訪問した者

その出来事から一世紀後、イラン・イラク戦争時の一九八五年三月十七日にイラク大統領から「四十八時間の猶予期限以降、イラン上空を航行禁止区域とし、イラン上空を航行するすべての航空機を無差別に攻撃する」との声明が発せられ、イラン在住の外国人は期限内に出国しようとする。殆どの日本人にとって利用できる飛行便がなく、頼りの故国、日本からの救出機は派遣されず、絶望迫る中、トルコがトルコ航空の最終定期便の前にもう一機、臨時便をテヘランに飛ば

したとされる。

串本

本州最南端、潮岬が属する和歌山県串本町の串本節に「ここは串本、向いは大時代にロシア人という異文化の人を受け入れ、さらに技術的な問題も工夫して日本で初となる西洋式帆船をロシア人のために建造した、戸田の人々の心と匠は今日に伝わっている。



写真9：戸田造船郷土資料博物館二階入り口

島、仲を取り持つ巡航船」とあるが、その大島（以前は東牟婁郡大島村）の岩礁で、一八九〇年九月十六日夜、トルコの軍艦エルトゥールル号が座礁する。

沖を通過する筈であった同号は、台風の暴風雨に遭遇し（この台風にあつては日本の船舶も四国沖で複数沈没している）、大島最東部の樫野崎灯台付近の岩礁に衝突して破船し、また爆発も起こったとされる。船は沈没し、六五〇名以上の乗組員のうち五八〇余名が死亡する。岸に達した生存者の中に崖をよじ登って現地の人に助けを求めた者がいたことで、事故は知られるに至る（写真10）（写真11）。

上陸した者六十九名は全員、同夜から出動した大島村の村民らに救助される。村長らの指揮の下、村中の医者が協力し、寺院を救護所とし、村民は労働のみならず、なけなしの食物や衣料を供して、言葉も通じない異国の遭難者を助ける。また、遺体を捜索し、収容して埋葬



写真11：樫野崎灯台。件の難船の夜も海に光を送っていた。



写真10：エルトゥールル号はこの岩礁で破船。水平線付近に航行する船が見えるが、嵐に遭わなければエルトゥールル号もこのように通過しただけであった。

すことになり、二一五名の日本人が救出される。二機目がテヘランを離陸したのは三月十九日十九時三十分、期限まで残り一時間というきわどきであった。

在イランの日本大使がトルコ大使を通じて、また在トルコの企業駐在員が直接トルコ首相に助けを求めた結果、その臨時便は飛ばされた。イラン内には空路は叶わず陸路トルコに逃れなければならなくなるトルコ人がいた中で、トルコ政府は自国民より日本人の救出を優先した。それに対してのトルコ国民の非難はなかったとされている。その五年後の湾岸戦争時にも、トルコはイラクの人質となった日本人解放のためのプロセスにおいて日本を助ける計らいをしている。

外国について親日的とか親日国といった表現を目にすることがあるが、何をもって親日とするのであろうか。思い込みの要素も無きにしても非ずと思われる。しかし、少なくともトルコが親日国であるということには首肯したい。トルコ人

への「好きな国」を答えるアンケートで日本は上位だという。トルコは北の隣国、ロシアに難儀した国ゆえに、ロシアと何かと因縁のある日本に対しての好感度が高いとも聞かすが、エルトゥール号の一件はトルコが親日であることに大いに関与していそうである。また、第一次世界大戦時にロシアの捕虜となりシベリアに送られていたトルコ人を、ロシア革命後に日本が海路トルコに帰還させたという史実があることにも触れておきたい。その事業を指揮した旧日本軍の軍人が、外交上の問題を含む如何なる困難があっても搬送対象のトルコ人をとことん守りぬいたというところで、トルコにおいて人道的行為として評価されていると聞く。

御宿とメキシコ、戸田とロシア、串本とトルコ、何れも難船があつて縁が生じている。そして、御宿、戸田、串本の何れにおいても、その縁は大切にされている。

る。では相手の側はどうであろうか。それに関わることは既に各々言及したが、串本とトルコの関係は特筆すべきものと思える。串本町はトルコとの縁を殊の外大切にしており、件の難船地近くにはトルコ記念館(写真13)が一九七四年に建設され、同町を訪れると「親トルコ」がひしひしと感じられる(写真14)。

トルコの側の串本への思いも小さからずであるようで、トルコの二つの都市が串本と姉妹都市となるなどしている。さらに彼の国の日本という国に対する好感度の高さは上述のとおりであり、また両国の関係はすこぶる良好にて推移していると思われる。ただ、エルトゥール号やイラン・イラク戦争時のトルコ航空機の話など、日本でも映画になったりテレビ番組で取り上げられたりしてはいないもの、彼我の、相手に対する評価には温度差を感じないでもない。ともあれ、エルトゥール号難船以来の縁は確実に今日に生きている。

(御宿および戸田についての江戸時代の出来事に関しては、その日付は和暦で伝わっているものを陽暦に改めて記した。また、写真7および9は戸田造船郷土資料博物館の許可を得て撮影したものである。)

参考文献

安藤操(意訳・解説)『ドン・ロドリゴの日本見聞録』たにぐち書店、二〇〇九年

エルトゥール、オメル(山本雅男、植月恵一郎、久保陽子訳)『トルコ軍艦エルトゥール号の海難』彩流社、二〇一五年

加藤秀俊ほか編『人づくり風土記…全国の伝承江戸時代 22(ふるさとの人と知恵・静岡)』農山漁村文化協会、一九九〇年

門田隆将『日本遥かなり―エルトゥールの「奇跡」と邦人救出の「迷走」』PHP研究所、二〇一五年

白石仁章『プチャーチン―日本人が一番好きなロシア人』新人物往来社、二〇一〇年

鈴木かほる『徳川家康のスペイン外交―向井将監と三浦按針』新人物往来社、二〇一〇年

戸田村文化財専門委員会『ヘタ号の建造―幕末における―戸田村教育委員会、一九七九年

ペレス、ロレンソ(野間一正訳)『ベ아트・ルイス・ソテローロ伝…慶長遣欧使節のこきざし』東海



写真13: トルコ記念館。エルトゥール号遭難に関する資料も多数展示されている。



写真14: 串本市内のホテル(串本ロイヤルホテル)のロビー付近の壁

大学出版会、一九六八年

森永堯『トルコ 世界一の親日国―危機一髪! イランに留日本人を救出したトルコ航空 明成社、二〇一〇年』

山田邦紀、坂本俊夫『東の太陽、西の新月―日本・トルコ友好秘話「エルトゥール号」事件』現代書館、二〇〇七年

レイヴァリ、ブライアン(千葉喜久枝訳)『航海の歴史―探検・海戦・貿易の四千年史』創元社、二〇一五年。

串本町役場企画課「色あせない絆」『広報くしもと』二〇一五年十二月号、2-15ページ。https://www.town.kushimoto.wakayama.jp/gyosei/kohou/2015/files/koho_2015_12.pdf (二〇一一年十月五日)

日西墨三国交通発祥記念之碑建立八〇周年、サン・フランシスコ号漂着四〇〇周年記念事業企画実行委員会「日西墨三国交通発祥記念之碑建立八〇周年、サン・フランシスコ号漂着四〇〇周年記念事業企画書」https://www.town.onjuku.chiba.jp/content/files/old/kitakuzatseika/kikaku/400/400kitaku.pdf (二〇一一年十月四日)

土屋とも江「ツムラ・ユキチ通り」トルコに日本人名の通りが登場…平明丸事件の真実」FNZブログオンライン、二〇一〇年。https://www.fnz.jp/articles/~98013 (二〇一一年十月五日)



写真2：足利尊氏像

「おじゃる丸、シャク返せ！」で知られるシャクは、漢字で「笏」と書く。シャクは中国から伝わり、男性が束帯を着た際、威儀を整えるため右手に持った。束帯は平安時代以降の公家の正装であるから、古来の正装姿の銅像にはシャクがつかさものである。

例えば、墨俣一夜城の豊臣秀吉像（写

真1）や、足利の足利尊氏像（写真2）などがある。こうしたシャクを持つ銅像を本稿では、便宜的にシャク銅像を記す。なお、ヨーロッパの国王が戴冠式に持つのも笏（王笏、帝笏）というが、王笏銅像は今回は扱わないこととする。

鹿児島県の照国神社には、薩摩藩藩主・島津斉彬（一八〇九〜一八五八）（写



銅像よもやま話 9

シャク銅像

高山陽子

A BRONZE STATUE

STORY

写真1：墨俣一夜城と秀吉像

右 写真3：島津斉彬像
左 写真4：島津忠義像





写真5：和氣清麻呂像

真3)と島津久光(一八一七〜一八八七)のシヤク銅像がある。同神社には、島津忠義(一八四〇〜一八九七)の銅像もあるが、こちらは大礼服の姿である(写真4)。それは、一八七二年、直垂や狩衣などが廃止され、西洋式の大礼服が正装として導入されたためである。

シヤクは、臣下用と天皇用に分けられる。基本的に臣下用は上下とも円形、天



写真6：菅原道真像

皇用は上下方形であるが、神事の際には上円下方を用いる。奈良時代末期の「宇佐八幡宮神託事件」で知られる和氣清麻呂(写真5)は、上下方形のシヤクを持つ。

八世紀、僧侶の弓削道鏡は孝謙天皇の寵愛を得て太政大臣となり、天皇の地位も望むようになった。道鏡に讓位すれば天下太平となるという宇佐八幡宮の神

託を告げたところ、孝謙天皇は清麻呂を宇佐に派遣する。清麻呂は死刑を覚悟して道鏡を排除すべきであると述べる。清麻呂は大隅国(現、鹿児島)に流されるが、道鏡失脚後、都に戻り、平安遷都に尽力した。

このように天皇に忠実であり続けた清麻呂の肖像画は、一八九〇年発行の一〇円札に印刷されたほか、軍票にも用いら

れた。清麻呂の銅像の建立は、一九四〇年の紀元二六〇〇年記念事業として計画された。当時、清麻呂と楠木正成は「文武の二忠臣」と見なされたが、元々、武士としての正成と相對するのは菅原道真

であった。

そのため、一九二二年、道真像の建設計画が立ち上がり、渡辺長男が制作を担当した。道真像は、皇居外苑に設置するはずであったが、宮内庁に断られてしまった。結局、一九三七年、高尾の御衣公園(現、高尾天神社)の高台に落ち着いた。高さは台座を含めて一四・五メートルもある巨大なシヤク銅像である(写真6)。

北野天満宮や太宰府天満宮など、各地に道真を祀る天満宮があるものの、道真の銅像そのものは少ない。一般的に天満宮に鎮座するのは臥牛の像である(写真7)。天満宮に牛の像があるのは、道真が丑年生まれであるなど、所説ある。今では、天満宮の臥牛を撫でると病気が治る、頭がよくなる、縁起がよいと信じられている。

学問の神として信仰される道真は、平安時代中期の学者・政治家である。菅原家は代々学者の家で、道真も幼いころか

ら漢学を学び、三三歳の若さで文章博士(学者の最高位)となった。道真は、唐の弱体化を理由としに遣唐使を廃止し、国風文化の展開に大きく貢献した。こうした躍進が周囲のねたみを買ひ、道真は右大臣の藤原時平の策略にはまる。九〇一年、大宰府に左遷され、九〇三年に大宰府で死亡した。すると、京では次々と不幸が起こった。その原因を道真の怨霊であると恐れた人びとは、道真を天神様として祀るようになった。やがて、怨霊としてのイメージは薄れ、生前の神童のイメージが強くなったのである。

銅像にとって、生前の身分を表す衣服は重要である。衣服と同様に手に持つものにも大きな意味がある。シヤク以外に銅像は何を持っているのだろうか？

二〇〇四年から使用されている千円札の顔となった野口英世(一八七六〜一九二八)の銅像は、上野の国立科学博物館前に立つ(写真8)。実験中の姿で試験管を持った姿をしている。台座のプレート



写真7：大宰府天満宮



写真9：武田信玄像



写真10：川中島古戦場

一九三二)である。新札の顔になることが決まると、日医会館ロビーの北里の像は、石膏からブロンズヘグレードアップした。

軍配を持った銅像もある。甲府駅前の

武田信玄像は軍配を持つ(写真9)。信玄像は一九六九年四月二日(命日)に完成し、前広場の整備に際して一九八五年、現在の場所に移設された。信玄餅で有名な桔梗屋から「信玄軍配」

という菓子が販売されているように、信玄と軍配は切り離せない。川中島にある上杉謙信との一騎打ちを描いた銅像でも信玄は軍配を持っている(写真10)。軍配は信玄に特有だったわけではなく、戦国

にはラテン語で「PRO BONO HUMANI GENERIS (人類の幸福のために)」と刻まれている。

細菌学者であった野口英世は、「黄熱病のワクチンを作った」と語られる。野口は、一九一一年、ロックフェラー医学研究所で梅毒スピロヘータの純粹培養に成功したと発表する。一九一三年に小児麻痺の病原体と狂犬病の病原体、さらに、



写真8：野口英世像

一九一八年には黄熱病の病原体を発見したとそれぞれ発表する。

しかし、小児麻痺と狂犬病、黄熱病の病原はウイルスであることが判明し、梅毒スピロヘータ培養の業績も後に否定された。前者の誤りの原因の一つは、顕微鏡にあった。当時、野口が使用していた光学顕微鏡は病原性細胞の観察は可能であったが、それよりも小さいウイルスを観察することはできなかった。ウイルスを観察できる電子顕微鏡は、野口の死後一九三一年に実用化された。

野口は一九一八年、黄熱病が蔓延していたエクアドルに赴き、現地の医師から病原菌患者の検体の提供を受けて、黄熱病のワクチンを開発する。ところが、この検体は黄熱病と症状がよく似たウイルス患者のものであったため、野口が開発したのもウイルス病のワクチンであった。

その後、黄熱病の研究のため、西アフリカへ行き、黄熱病に感染する。発症からわずか一〇日で死亡した。それは、野

口が渡航前に接種していたのはウイルス病のワクチンだったためである。実際に黄熱病のワクチンを開発したのは、南アフリカのマックス・タイラー(一八九九〜一九七二)であり、ノーベル生理学・医学賞を受賞した。

野口の細菌学研究上の業績は、後にほとんど否定されたが、彼が幼いころから神童であり、懸命に研究に挑んだことは事実である。福島の猪苗代の貧しい家に生まれ、幼少期に左手に大やけどを負いながらも、がむしゃらに勉学に励み、難関と言われた医師開業試験に合格し、何の科ネもないまま設立されたばかりのロックフェラー医学研究所の主任研究員となった。

子ども向けの伝記にはあまり触れられないが、彼が金銭的にだらしなかったことも有名な話である。何度も借金を踏み倒したという。野口英世の千円札もあと数年で新札に変わる。新札の顔は「日本の細菌学の父」北里柴三郎(一八五三〜



写真13：郷照寺



写真14：包公像

ものである。中国に伝わった閻魔は仏教に取り入れられ、死者の生前の行いを審判する冥界の王となった。人が死んで閻魔になるという信仰が広まり、特に北宋の名判官の包公（包拯）が「閻魔包公」と呼ばれ、広く信仰されている（写真14）。

写真14は開封の包公祠の包公像である。扁額の「正大光明」は、公明正大という意味であり、包公の人柄を示すものである。包公像はシャクを持っていないが、閻魔と同じく横にびよーんと長い帽子をかぶっている。これは幞頭（長翅帽）

という頭巾で、役人同士のナイシヨ話を防ぐためであったともいう。

武将は広く軍配を持って指揮にあたりつた。大阪城内の豊国神社前の秀吉像も軍配を持つ（写真11）。墨俣一夜城（写真1）の好々爺的な印象と全く異なり、戦に臨む凛々しい姿である。軍配を持てば戦国武将、シャクを持てば公卿である。このように銅像は、衣服と持ち物でその人物の社会的属性を伝えることができる。

墨俣一夜城は、一五六六年、木下藤吉郎（秀吉）が一夜にして建てたと伝えられる。織田信長がこの城を拠点として美濃を攻めたため、秀吉は成果を認められ、出世の道を歩む。長浜城を与えられた秀吉は、羽柴秀吉と名乗る（写真12）。そして、太政大臣となつてから豊臣秀吉と名前を変える。つまり、木下藤吉郎と名乗っていた頃は、シャクを持つほどの

身分ではなかったのである。ということ、墨俣一夜城の秀吉像は何かとチグハグな感じがするが、そもそも、この城は、一九九一年に作られた模擬天守、すなわち、主に観光用に作られた想像上の天守なのである。想像上といえば、シャクを持つ閻魔も想像上の姿である（写真13）。閻魔は、インドの冥界の王・ヤマを漢語に音訳した



写真11：豊国神社の秀吉像



写真12 長浜城の秀吉像



写真1

授業実践

アクティブ・ラーニングの実践例

高山陽子

二〇二〇年度からのコロナ禍では、教員は従来とは異なる授業方法の実践に迫られた。いくつかの授業方法を試みた中で、学習効果が高かった科目について紹介したい。

科目名は「世界遺産論」である。従来の授業では、宗教的聖地や産業遺産、負の遺産などを取り上げ、テキストの輪読を通して、こうした遺産が観光化される際の諸問題を考えてきた。初回授業で担当を割り振り、担当者がレジュメを作成し、発表するという方法で授業を進めてきた。当然ながら、この方法では自分の担当以外の箇所は十分にテキストを読んでもこないという問題が生じる。毎回グループワークを行い、課題についてそれぞれ考えさせたが、学生の理解度は十分ではなかった。

そこで、授業のオンライン化に伴って、在宅の強みを活かした仕事を課題にした。二〇二〇年度は「工作用紙で三重塔を作りなさい」、二〇二一年度は「卵の

殻でモザイクを作りなさい」という課題を出した。

工作の課題は、授業の内容と関わっている。二〇二〇年度は田口かおり「保存修復の技法と思想―古代芸術・ルネサンス絵画から現代アートまで」（平凡社、二〇一五年）をテキストとして文化財修復をテーマとした。文化財は修復に際して模型を作ることがあるため、三重塔の模型作りを最終的な課題とした。それにあたって、二〇一九年四月に起きたパリのノートルダム寺院の火災と修復について事前に調べさせた。

二〇二一年度のテキストは、田中英史『文化遺産はだれのものか…トルコ・アナトリア諸文明の遺物をめぐる所有と保護』（春風社、二〇一七年）と家永真幸『国宝の政治史…「中国」の故宮とパング』（東京大学出版会、二〇一七年）である。前者の表紙に使われたのが、トルコ南東部ガズリアンテップで出土した「ジブシーの少女」というモザイクである。少女の瞳

が印象的なこのモザイクは、ゼウグマ・モザイク博物館に展示される大変有名な文化財である。この写真にヒントを得て、今年の課題はモザイク工作にした。

国際関係学部の専門科目であるため、美術的な技巧を専門に教えることはできない。工作には、誰にでもできる方法で、かつ、材料費がかさまないことを心掛けた。

卵の殻モザイク工作は、極めて単純である。薄皮をむいて乾かした卵の殻を画用紙に貼り、その上から絵を描くだけである。先に卵の殻に色を塗って、それを画用紙に貼り付ける方法もある。どちらにしても、ジミな作業を根気よく続ける必要がある。

学生に工作の課題を出す際には、先に自分でサンプルを作成し、それを動画にして大学の教育支援システム (manaba) にアップロードしている。二〇二〇年度は五重塔の動画をアップロードし、二〇二一年度は多文化共生の定番のモチーフ

である虹の作品をサンプルとしてアップロードした（写真1）。

四月の初回授業で工作を課すことを述べ、「卵の殻を集めておきましょう」と指示を出した。約百名の履修者のほぼ全員が課題を提出し、想像以上に手の込んだ作品が多数見られた。その中の四点が以下の写真である（写真2）（写真3）（写真4）（写真5）。

課題提出後、二回に分けて講評会を行った。講評会では、なぜそのモチーフを選んだかを一言ずつ話してもらった。課題では、卵の殻を使用するだけでなく、モチーフは何でもよいとした。すると九割以上の学生が、花や動物、風景など自然をモチーフに選んだ。例えば、卵の殻を画用紙一面に貼って、タイトルを「洗濯機」にするといったデュシャンの作品は見当たらなかった。提出の季節を反映して、アジサイ、ヒマワリ、朝顔、花火が多く見られた。講評の最後では、ラスコーの洞窟の写真を見せ、モチーフ

の選択については地域や時代によって大きな違いはないことを確認した。
モザイク作成を通して、「文化財（作品）は誰のものか？」を考えるようにと指示を出した。それを踏まえて、講評会后、モザイク工作を行った感想を提出させた。以下がその代表的な感想である。

「今回、何年ぶりに工作をして想像以



写真5

上に楽しく、殻を紙に貼る時はモザイク工作のことだけを考えた。特に何をモザイク工作で描くのかは決められていなかったもので、色々なモザイクの想像ができた。殻を紙に貼っている時にだんだんと殻の白さが、沖縄などでよく見たことのあるサンゴや割れてしまった貝のように見える、海を描こうと考えた。」（一部表記を改めた）



写真2



写真3



写真4

「絵のうまさや下手さなど人それぞれだが、どのような思いで描いたのか、その絵の意味などを聞いたら、上手い下手ではなく作った人の思いなどが大切でどれも魅力的な作品だと感じた。」

「三時間スマホを操作せずに何かに没頭することがあまりないので、たまにはスマホから離れて何かに集中する時間も必要だと気付き、それができるのが作品作りであると感じた。」

「卵の殻が思ったように貼り付かなくて大変でした。実際に自分で作品を作ってみると愛着がわいて、とっておこうと感じた。だから、作った人にとっては、作品は大事なものだと感じた。文化遺産の返還問題も、作った人の国に保管しておきたい気持ちもわかった気がした」（一部表現を改めた）。

「長い時間と手間をかけて作ったこの作品の権利は自分にあると言いたいが、こうして指示されない限りこのようなものを作ることは人生でないであろうと思うので、学校の側にも権利はあるのではないかと思った。」(一部表現を改めた)

「今回の作品は課題として作ったと言えど、時間も労力もかけてこだわって作り上げたため、こうした自分の作品があまりと自分のいない場でお金で取り引きされていくと想像すると悲しくなる。」

初回授業において、「文化財は誰のものか?」、すなわち、産出国のものか、略奪国(文化財を保護してきた国々)のものか、というアンケートを実施した。アンケートの前に、イギリスやフランス、ドイツなどの略奪国が保護のために尽力してきたことを強調したためか、七割の学生が文化財は略奪国が所有権を持つと回答した。

である。来年度はアマゾンの封筒を利用して、白川郷の合掌造り集落を作成する予定である。履修者が数十人いれば集落が完成するだろう。

アマゾンの封筒をウネウネに沿って切って重ねると茅葺屋根のように見える(写真6)。紙は重ねると重くなるのでそれを支える構造が必要となる。こうした工作を通して、実際の茅葺屋根を支える家屋の構造を理解することができる。せっかくなので、周囲の環境作りにも挑戦してみたい。

その後、授業で文化財略奪の経緯や戦時下の文化財略奪などを扱い、工作の課題に入った。最終授業でもう一度、「文化財は誰のものか?」というアンケートを実施した。すると、答えは逆転し七割の学生が文化財は産出国が所有権を持つと答えた。個人的には、文化財の所有についての考え方は人それぞれであって構わないと思うが、学生が授業の内容を理解し、新しい視点を持ったことは大きな成果ではないかと考える。

工作の課題を出すもう一つの意義は、もの作りの楽しさを再認識させることである。学生の多くが「久しぶりに絵具を触った」と述べたように、大人になるにつれてもの作りをする機会は減っていく。反対にSNSに没頭する時間が増え、ヴァーチャルな情報を得ることのみが増えていく。

一般的に言われるように、ヴァーチャルな情報で肥大化した脳は、人に幸福感をもたらさない。それどころか、自己の

劣等感や他者への憎しみを増加させる傾向がある。SNSから離れるには、何かを作る集中力とそれを作り上げた達成感を抱かせる必要がある。工作はそれに最適な作業である。実際には、「できあがったときに、できたー!と叫んだ」といった達成感が述べられていた。さらに、「夏休みにもう一回作ってみようと思う」、「別の工作もやってみよう」という感想もあった。さらに、ものづくりに関心を持つと、文化財の見方も変わっていく。「コロナがおさまったら美術館に行ってみよう」という感想を述べた学生も少なくない。

工作課題の他には、芸術家に関する映画を鑑賞して、感想を提出させた。「真珠の耳飾りの少女」(二〇〇三年公開)を選んだ学生は、芸術家は好きなように作品を作っているのかと思ったが、パトロンとの関係が制作に大きく影響することがわかった、という感想を述べた。

工作の課題は次年度以降も続ける予定



写真6

執筆者紹介（五十音順）

青山 治世（あおやま はるとし）

国際関係学部国際関係学科・准教授。
主な研究分野は、中国近現代史、東アジア国際関係史。

大塚 直樹（おおつか なおき）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・准教授。
主な担当科目は、観光地理総論、フィールドワーク入門。

小磯 千尋（こいそ ちひろ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。
主な担当科目は、比較宗教論、南アジアの社会と文化。

高山 陽子（たかやま ようこ）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。
主な担当科目は、世界遺産論、テーマパーク論。

中野 達司（なかの たつし）

国際関係学部多文化コミュニケーション学科・教授。
主な担当科目は、体験で学ぶ地球環境論、中南米の社会と文化。

榎 KaYa 国際関係・多文化フォトジャーナル Vol. 09

2022年3月31日発行
発行：亜細亜大学国際関係研究所
制作：株式会社松籟社

問い合わせ先
亜細亜大学国際関係学部
〒180-8629 東京都武蔵野市境5-8
<http://www.asia-u.ac.jp/academics/international/>

本雑誌記事の無断転写を禁じます。
©2022 Faculty of International Relations, Asia University